東都

望京狂歌ところ人名鑑記

利9
2890

利へ門 8890

古人附甲乙合印定

	景品附 四十七点より四十三点迄	景品附 四十三点より三十八点迄	景品附 三十八点より三十五点迄	景品附 三十五点より三十点迄	立評 奥歌印
	當座 十点印	當座 十三点印	當座 十二点印	當座 十点印	兼類立評合印 歌合催主印 當座合印
年中月次會日	毎月 梅賀 六日	毎月 飯盛 十三日	毎月 眉住 十六日	毎月 長根 十七日	毎月 川越 高波 廿日
	毎月 停々 十二日	毎月 和稙 十五日	毎月 則次 十六日	毎月 英賀 廿日	毎月 負俊 廿三日

歌よみて十月廿日より今をひくもあり

游甲亭

三景詩歌よみ人名寄細見記序

五十町行かんと戦しれば秀句もそ出れあり翌朝の景ふ下松葉巻玉葉万連歌俳諸今為今集の風を仰らかれハ

古歌神代ハ山口三浦候ふ絶て新しき歌向を新拾網新古坂の名ふ古風新体とりぐ世数まして古風逐歌今おくすれば我人和むうとて

尾花ハまれとしは道ふ入り梅本の秋ハ

まくふ錦公繍ふ浦ふ亭たれ山の絵模ひ改名の被為すと見

嘉ふ笠ふれ山を稜ふ嘉ふ紅葉の川を渡て加ふ松ふ五月のこ仏ふ

おの年賦出さ為ふ山岡公卿抽を修りて

脱二の遊甲ふ居れ今ハ仏と為れ仏と顕に

結ひて[illegible]と配り。[illegible]筆[illegible]を。掛く役目の掛[illegible]。

四[illegible]風流亦侫し[illegible]。[illegible]

[illegible]。[illegible]。[illegible]。

ひとき[illegible]。[illegible]。[illegible]。

[illegible]。[illegible]。[illegible]。

[illegible]。[illegible]。[illegible]。

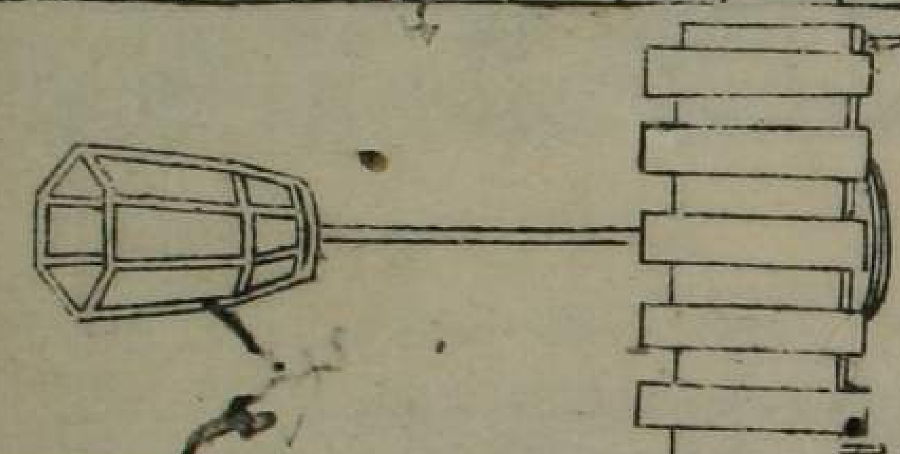
[illegible]。[illegible]。[illegible]。

文政改元夏六月　本町庵三馬題

甲乙之通り披講場

悦信亭 まのせ
麻中園 保 世
便々舎 湖 静
未覺庵 又 明
長歌園 守 秋
小松亭 京、之
二十九点之とまり
絡るや 額 輔
郷莽 相 兜
楼蝶亭 蘇 峯
秋菓 香
その比 楽
松々亭 千 枝丸
六樹園 南 北

蛛休亭 長 栄
珠のや 英寿丸
大福舎 笑 寿
たぬき堂 空 漿
撫停 友 馬
謡琴亭 康 糸
三十点より二十九点迄
八百亦 薫 人
冠森楼 笑 名
屹嚢閣 華 々
双放堂 乙 女
四布堂 きわくみ
東風亭 舎
歌のや 嘉 薮



綾増亭 笑人 男
二十七点之部
要々亭 未 広
不言亭 梅 李
金陵楼 含笑
淋洲庵 歌 福
風桑庵 花 人
万宝亭 嘉 楼
花盛庵 待 気
室佑楼 松 久
芦の屋 行 楽
玉光舎 白 山
紅雪堂 梅 うつ
二十又点之部

二十六点之部
砂楽亦 名 丸
栄桑庵 鼎 昇
三堂 喜 弓
三愛庵 栗 々
一象宮 文字丸
分別庵 玉 道
李のや 春 樹
二十八点之部
梅柳庵 春 江
卧龍亭 硯 雪
相生庵 鶯 成
江戸崎 長 人
豆小路 味噌 成
内弁 明 良

二十三泉之部

和曲亭 道人
六義亭 宝馬
山吹舎 清喜
藍田舎 刈安
望月庵 満志栄
平安亭 七辻
艾中小 學経
秋蔵舎 掩 良
萬葡園 猪丸
秋の家 立門
松亭 旅ヨ

入堂 東
青柳舎 綫
春朝亭 青
鶯宿園 梅古
竹のや 虎丘
桑乙亭 逸窓
放蕩亭 如安
青静菴 桃賓

二十四泉之部

芍薬亭長根 撰

長人　春朝　小萩　常見　清武　象道　赤備　一馬

根吉　花満　錦洲　糸光　玉留　冬信　寓亭

六樹園飯盛 撰

先丸　歌道　福恒　亥鳥　高丸　新主　佛丸　清澄

貞俊　盤砂　綾重　千尋　鶴成　綱人　蔦綫　万守

■臥龍園梅麿

梅村　梅景　梅鳳　梅久　梅人　裏丸　梅綱

道網　梅友　伯墨　好文　梅時　梅盛　三守　歳人

〈花の
〈月の
〈雪の

緑町入口　　久右ゑ門町

■神田居真鳥

三馬　綫機　一象　色成　久佳　有安　糸匹

一友　三蘭　曾磨　阿奏　和則　百成　紫樹　山守

〈花の
〈月の
〈雪の

■鈍々亭和樽

桃人　梧眞　升成　安良　麟馬　家長　千恒　枝城

月盛　穠表　峯表　兎雪　琴月　文芳　文守　菊成

〈花の
〈月の
〈雪の

小路車入口　　馬喰町

錦糸亭綫機

宰守　安清　催馬　照人　谷斎　萬寿　和楷　香鳥

梅磨　菊香　高盛　二綱　宏守　通青　麻子　梅武　桐匹

〈東起
〈十二柔
〈十一評

琴 琵琶 笙 篳篥 笛 鉦鼓 太鼓 能管 三鼓 鞨鼓 楽人

花桂 一馬 桃人 和樂 白波 宋寺 後機

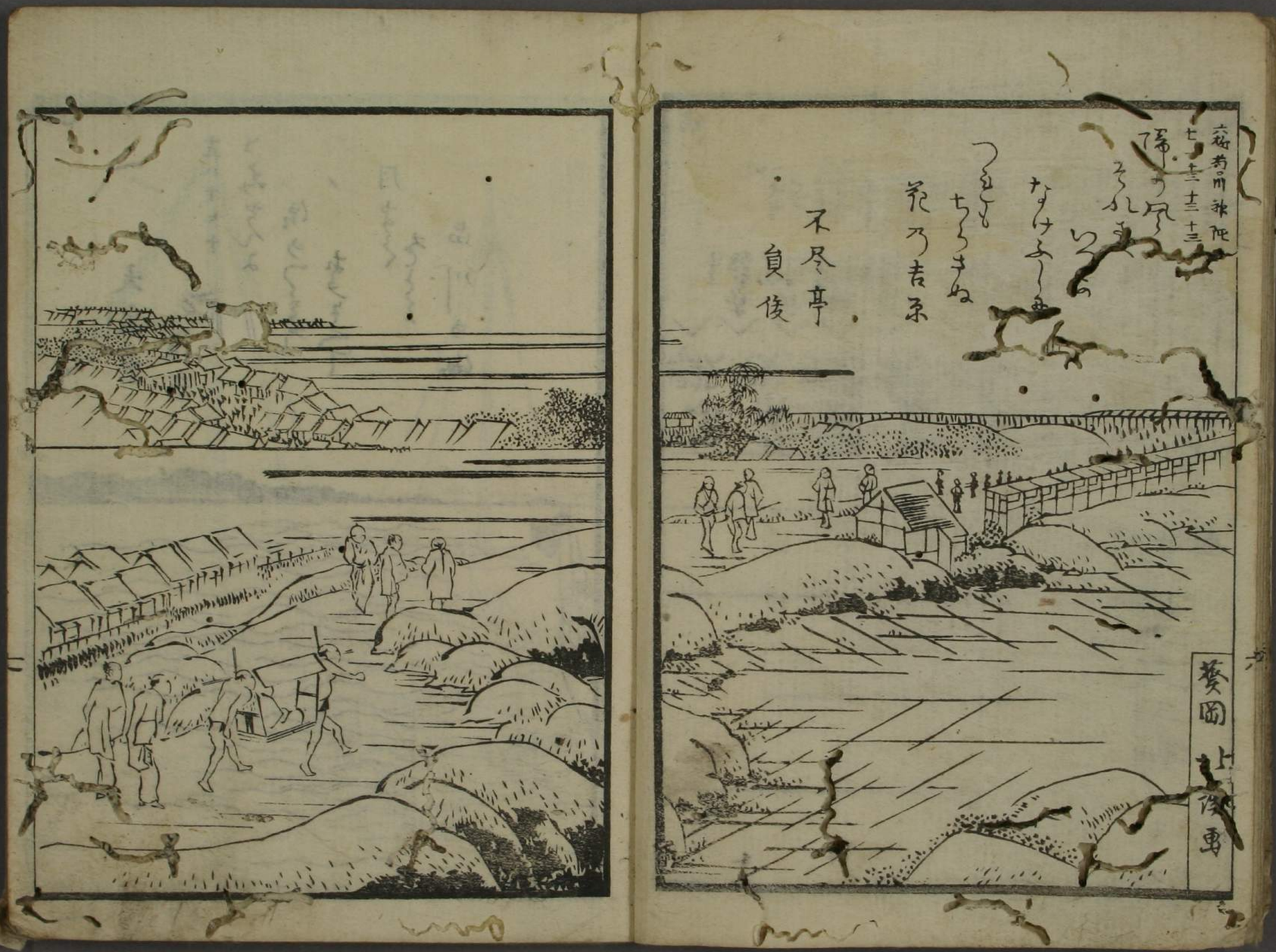
琴局 枝賢 後壹 枝成 糸光 手枝九 任 一梁 折立

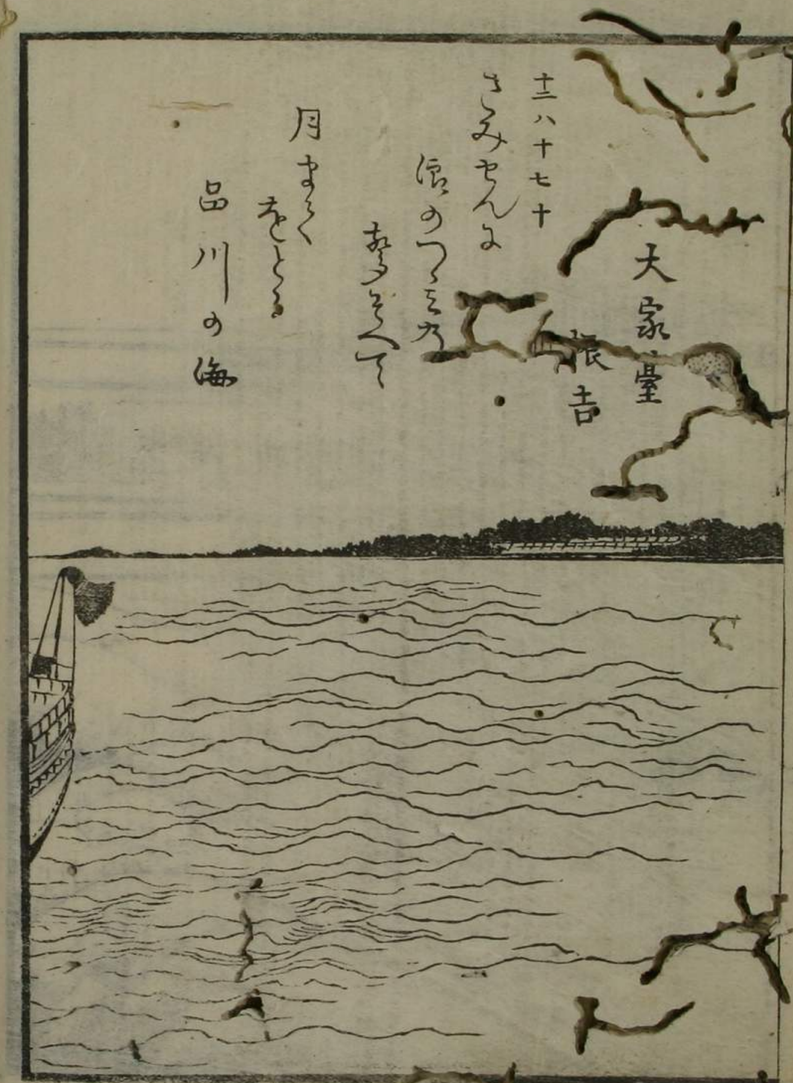
至清蘭捨奠

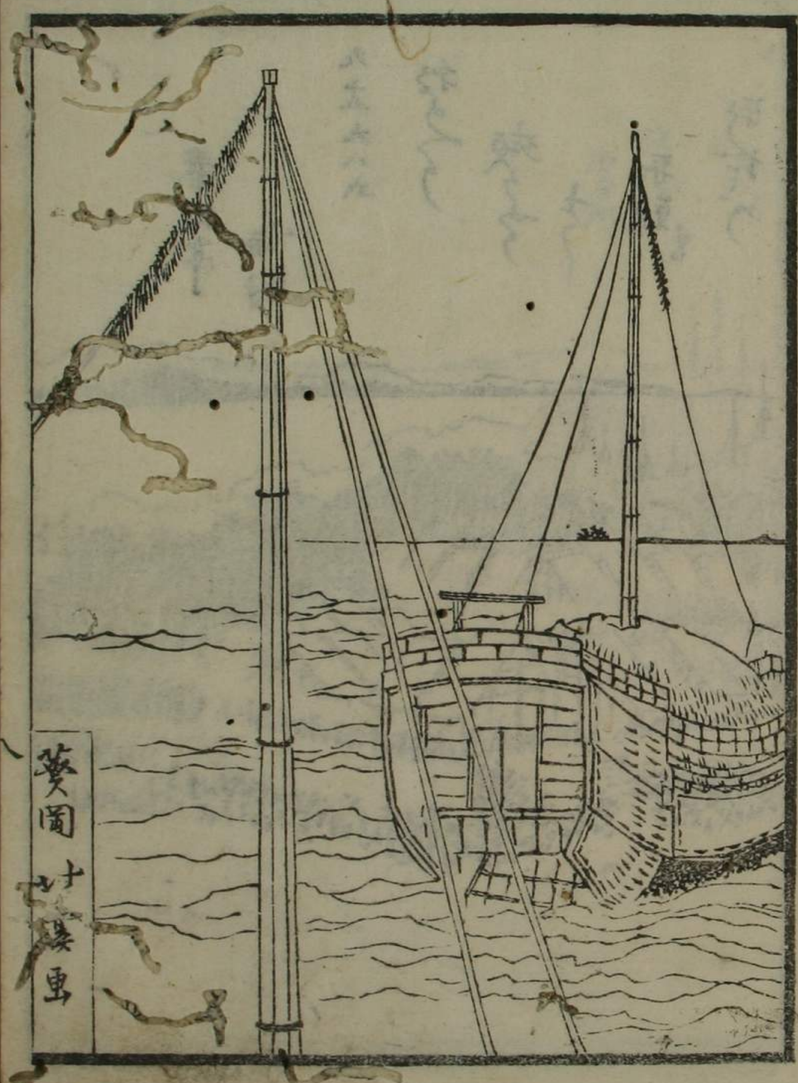
人丸大明神 安置 和歌祖

小家 松風 茅竹 下住 白髭

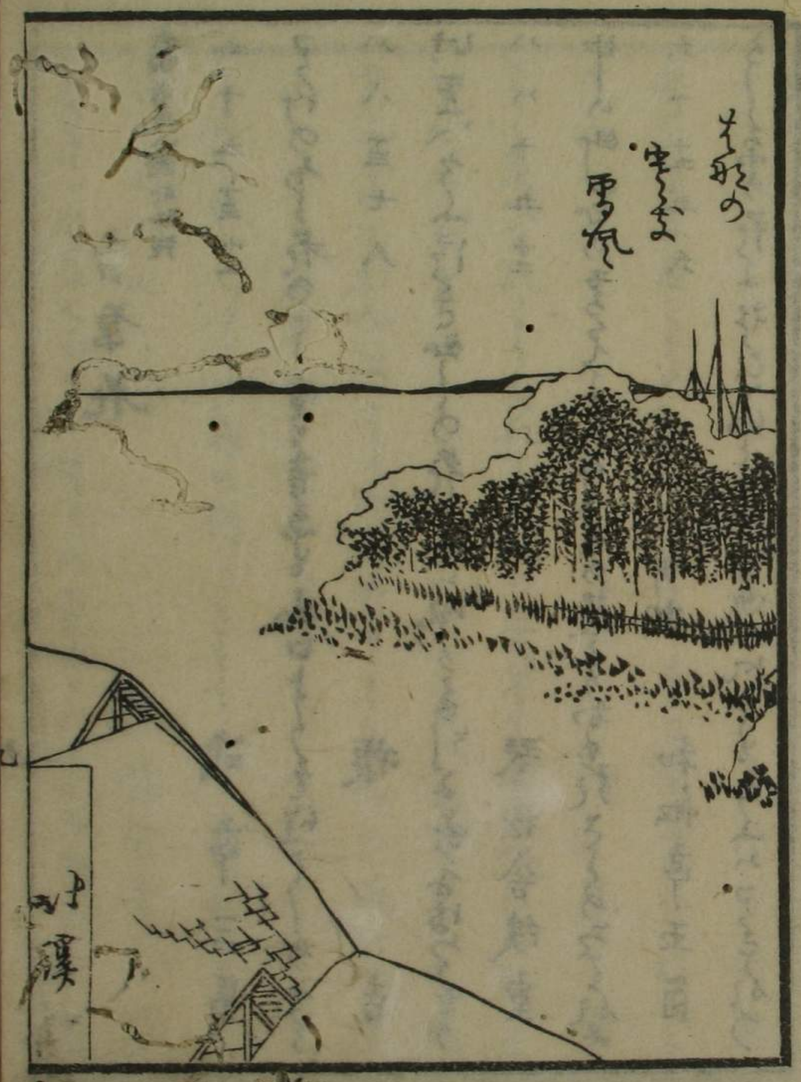
天王寺舞楽装束


六歌仙の内 僧正遍昭
七十三 十三
僧正遍昭
なけふしも
つもるも
ちるさくら
花乃吉原
不尽亭
負俵
賛図 上総屋


大家臺
長吉
十二八十七十
さみせんよ
信のつゝを方
あつそくて
月すゝ
をゝゝゝ
品川の海


蒸圖十七
重

春江亭
梅村
九十五九八六


山漢

吉原花

六樹 若菜 砂田社

五 十 五 十三 十二

ひとけのなき花の中にも吉原も山口よりそ咲ちらしける　式亭三馬

八 八 十三 七 八

此里へかよふ作者の花の香は風のまにまに筆よ作りもせり　根吉

八 八 十 五 十二

中の町花のまくらにあけつるの足とりおもしろさとの花ざかり　琴松舎鏤童

六 十 十五 五 六

よし原の花にうかれてひたすらに風をもかよふかな　川越 和船亭玉図

六 一 十五 十 十

かよふよる夜ざくらの花にさそはれ見する里の花のむれける　至清堂捨奥

十 六 八 七 十

よし原へかよふかされてゐる風の苦界を離れぬ花の桜木　カヌマ 浅春菴

八 八 五 五 十五

雲の中のてらんいろそり中の町にともる花の桃灯さくら　宝市亭非成

十 一 十五 七 七

ちるまでも散るよし見の作りもさそひおしまぬ吉原の花　文千尋

八 十五 七 八 七

吉原はむかしかはりて作りのゐるかよひそる枝の夕かな　福包庵雁成

千林屋十榮

七一十八十三

[illegible]花よ白さの似て[illegible]夫婦めてるに茶やう酒豆腐

八十八六

年〻赤安倍

梅〻よりひらく桜のつひらに枝をゑる花の文里

八一十三十六

白毛全万守

花さかり〻者〻もの身と茶やてる香のよう聖指くるなり

八十五七七

常聚赤冬住

九つにぬくうう里の夜桜ハ時ちひなる雪らそて雪

七十十五五

桂章一嶺九

里羽徹て〻一むれもくるてなるうれ夏ヤ月の夜桜

六八九七七

紅葉全谷吉

うう[illegible]の[illegible]ものの[illegible]花の雪のかよひち

六十十五六

後皇

さく花の雪のかうよ心形よ[illegible]のまう[illegible]枝の多雪

六十十五五

雄風全梅園

枝〻をる人や来ある〻花の[illegible]ハ天門とう答ものうん

六八七七八

傳判松代

蕭薫章一薫

沙弥の不二もあれうう春雪のやよひの花の財者うね雪

六一九八十五

花咲菴栄守

あつ[illegible]の新形〻も内の首年ふ[illegible]よかる花乃者う雪

七一七十十

与屠亭校成

桜ちらつゝいてあのくるとにかをそく長くそ植るとゝる

六六八七八　　拾　魚

よゝ聚とゝてにうゝて中の町くる俤りまや花の宴入

七一十五五六　　舟の屠　細人

細見の星のあゝまきさく花のまゝの中もく客こうもれの

六十七一十　　和国亭三道

吉原よ七月のさうゝるゝ花ゝこうみの反やまゝうん

七七七六七　　後　重

うゝ秀八風よつゝ袖衣役坂花よゝうゝと尺ゝう柳

八六八五六　　常春軒糸正

あゝゝひかゝとゝくゝ尺よゝよゝ俤ゝゝ八ゝよゝ俤花の比

一十。七十五　　臥　竜　園

爰又爰よさゝうの爰花の吉原よゝの衣のうゝうゝさゝ

六十五七五　　ヨリ井　百花亭兒雪

よゝ糸よさゝ桜とあゝのゝく吹比ゝゝふをよ補ゝもの花

八一十八六　　唐縫金糸光

ゝゝ頭八ゝゝゝ平部の恥さゝうゝなゝゝゝ月よ千人秀

六十五七五　　後　重

大門の咲傘ゝよゝくゝゝの夾合にゝくゝ花くゝのゝゝゝ

六八九五五　　文亭全蘆葦

よしつるや花の手つゝの月と三ん新樹なるさゝゐ行灯

五一一十三十三　　紫檀全小菊

さゝ原よむらゑを色ひとりや殆まてかよふ蝶ゝ

七七五七七　　色　成

中の町花咲ことてゝ夕ゝるゝ妙るお計も下ゝねひとひ

六十八一八　　巴　流　斗

あるひとひゝおくあるゝ家よ猶ゝさるゝ梅いさゝの春ゝ

六六八七六　　栗　聖　菴

行ゝひよ鞘あて蒲の中の町志の雪けの春よなゝ

八六七六六　　雀　成

蒲一日の入山形ハ所紅のさゝてさゝ里の秋ゝ

六六五八七　　碎　田　上　烟

やゝゝ花ことゝひぬゝしいゝれるん花ゝ春ゝゝ春の里

七八八一八　　歌乗車好文

中の町さゝゝのゝちゝおいゝんの二人秀と花の下ゝ

七一八八八　　舞　乗　楳

大門の口ゝゝ不むるゝ女つれ坐てゝゝさよ花乃一ゝゝ

七一十七七　　西　山　楳

さゝゝ花なれとつゝあの中の町さゝゝるゝれゝゝち行ゝん

三五一八五　竹宗亭和刈

行灯のかうけよ花とうそや徒ら雪ゝ尺なりてゐる秋掃

七六五八六　雀成

一とせ界（ちかうき世のちりつゝて花の心とかなゝ吉原

七八五六六　入江

夕つゝ日入山口の新嶺より出るもの栃灯さゝら

六八五七六　猿主

梅ゝとうあくある宝上袖引て秀のこゝふもらせ新ゐる

六七九八六　不老園

和尚ゝあけと下とゝ花ちゝひ尺さてゐる花の吉原

六一一十三十　歌筵亭梨樹

梅ゝそめゝそにゝきらひよ大門もうつ人ひやゝゝ花の千金

七一八七八　珠の屋吳寿九

内八野と女れ山とあれ吉原ゝ雪のうきの花の居續

三六十六六　丁ゝ亭梅時

ゝゝうる花さくゝゝ大門を出ても尺ゝうゝ森

七一七十十　不尽亭

うつ半て家もようきう花さゝ先ゝひゝ山口ゝ門

七七五七五　凉風亭岩守

あけゐの〳〵桜ゝもゝむ撰雪の茅さゝゝ里のきぬく

八一八八六

糸　定

名よそうそう晩初咲いふりて秀よつゝる花の金盛

六七八五五　北斗菴

そそゝゐのそゝそゝ歌のしらなるう花もくるるのつゝめ春さ

七十一七六　你谷　林李亭琴月

うつくしき指の花と指木よ山出らなきなり糸の里

八六五六六　長宋指梅盛

里ゝゝゝ糸ゝ宮のあるゝの花の枝さつてゝゝさよ女一もれ

七七七五五　糸　光

末社ゝゝつゝゝ花ゝもゐの長代の長とゝつゝれぬ大ゝ

六十七七一　文珠指仏丸

日ゝ面入山形よゝゝゝ星人とゝゝ出ゝゝゝ糸の花

七七七五八　堪忍舍二字ち

中の間花の信号のうゝれゝいゝとちゝき憂ゝ彩

七七一七八　千里亭

うゝその稱まゝゝる花と里ゝゝ名てゝゐゐあるゝとゝゝ多る

六一八十五　春霞亭志閑人　カヌニ

弱下弦の言もいゝ・や吉糸の名ゝよそにて

八一五六八　麻の紫桑の王

ゝゝ糸の名ハ指ゝくるゐの入おのゝゐぬ蕃やくちゝ

七六五六六

中の町さくらのてらんあれるちりかくとらは三狭つくこゝ　好文

五十七七一　ヨリ井　立常亭主

雪のあのあくる朽へもちりうせて雪のけしきや花の吉原　糸光

五十七一七

ものゝふのそうれくるの猩家主よなくこのうとに花吉原　手の家

八六五六五

仲の町花よりむくあてんのかさしの情もくるふ秀ら　仙多千柳亭

七八一七七

ちりまてい家中の月よ一二アん猩の手もかる吉原

八六九七

下町の家もてそあれ中の町花の袖を麦初の秋吳　鈍〻亭

八六七一八　霞仙亭桃人

下打〻見るも吉原さく家の雪の中ゆくきの〻やの松

八一八五八　春江亭

一二アん計秋さくらとちらくる秀の神や荒なくらん

十七七一五　陶〻亭催馬

文多郎もきのゝ猩の新ろくん えくら柳ひくうくる髮　冬〻住

五八七五五

中の町かせ〻ひさくらい信越てありやよ花のあやくらく

九一七七六

いとしくの子持る春よりちるよく花つくさの初花　不老園

五一一十三五　四神堂競

春と言くくらを梅の吉原に咲のかゝる花やちるらん

七六五六五　俄　綉菴

中の町花のさくらよ余意なく梅よ秀り名にてふるも

八六一七一六　英　寿丸

吉原く花の一ぞ梅てより二番ゝなる中の町

六六　十六　岐襄園華々

弱木弱の春よんとい生ゆもて梅よ春ゝつ形く吉原

三七十一八　園　廉梅笑名

春けくよ客ゝくるとよ山ゝの梅や花のおもゝなる

八一七七六　東風亭　舎

春てゝも又ぬ梅よ戻れと吉原の花よ春の鶯ひの雪と

七七五五五　八百　脊

夜さくらのさくらよ山ゝ久とちくゝ吉原

八八一七五　舞　楽　梅

春ゝ梅ゝ風ゝさゝてゝ花ゝ男の面ゝ蔵のうくもくさと梅

八六五八一　彷徨亭　仕

賞花小町さくらもまゝくよ多ゝ丸なむらひ花ゝくさの梅

八七三一。　　鈍々亭

たらんめの髪ちらしひ月ら性の羽のおくろらよくの花の春

七十五一六　　内糸　明良

中の町さくらに春ふつかなる三重てしつるあるむ弱午結の春

六一九八五　　西来　居

ちよこちらに花やちらんく待まるる風ふちらしふちの春ふ

六一八五八　　明　良

あるくるもひつうせんたくさうに花行てきく花の春ふ

七一七五八　　東水亭色成

ふなさき春ちの下持るさうりて花らさかんさくの陰

六八一七六　　花仙亭吉芳

いまちあくちくしつく病入あのう紙つくにてきちるね紙ひ

六一一三八　　芦蕃一馬

大門の春八花ゑ性るるの風の秋ちや付るなるくく

六十一一十　　桃亭

けてるらにむよくりて竹村の宮ちの月も微ふそうる

五十一六五　　塒亭友馬

鄰泉甲のてるゑ病の花ちりちにら微の多化紙くて

八一八一十　　カヌニ　狸空麻

ちら風の春ちのくるさちく青糸の花ゑ立百八紙人の内ある

七一五八七

美寿　九

ちるまでひら花よりもて情くの栄花の爰と結ぶ吉原

五一十七五　長孝　紀長人

見こしらへむとてこそ三ようの、ちやいりもの仲の丁ろも

五六五七五　ヨリサ　野孝　油守

うくく花ぬ爰らもとそその吉原ぶ珊瑚の花も小町柳美人花

一一九七十　川越　岡栗菴何夫員

花ままく立かくふる吉原よんめろんの雪とつくでくろ

五八一七七　栄守

植地の雪ぶくるくつきぶの赤ぶ十の赤のん日後ぶ

三一十三十一

天人も神ぶくくくんさく花の雪の下ぶ里のうれめ　催馬

六六八一七　一　栄

いくくくくもりぶなくくきみくくちるくぬ花ぶ花ぶん

七一八七五　僧馬

吸つるきくくのきみつれきひきて花の中ぶくの雪むき吉原

三十一七六　秋菊園香

中の町雪ぶくくきる雪兼新ぶ雪ぶ花ぶ久里

三一十七六　春潮亭梅久

植木屋とらぶ植木屋の地任雪花の裏ぶ花の吉原

三一十七六

内義表かゝえて花よつけさらの食事るさとの三枚詩文

六極園

三一十八五

二字守

全世界ようこそて世界ようこそあるあもつちろの秀ちろ

八一一十五

双六乞女

花の雪くこそるわたくし天つこそ太ちろあの姿ようこのは

光圓亭鮮馬

六一一十七

ちる花の雪の上りおらくん考しそこのあのこそこそ

万亭喜多留

六一一五十二

ちらくこそ桜のこれの下あくこそ白白つけ

六一一七十

中の町あけ〜義表のさつこそみたいとみやたのちかのさ

雅升楊

十一一七五

さく花の唇ちのも吉るみいおくこそるる入てさくこそん

柴一

三一一十八

桜ひあよくこそ浪と新さくこそるにやくこそとこそ

俳春菴

五一一十五

大門ようこそ空〜て楽このの天上白ちや花のこそ雪

佐徳舎積方

十一一一五

秋ひる何やよい一月火くこのもる学竹明や吉るや方花

八六五七八

千あまく花のつけ歯と大門の口て色ぬくつ茶やう拳酒

八八七一八　八工

中の丁茶やうさとうれの八幸梅花の香のゝ新のさと風

五六五七七　仝

中ノ町教三者の酒の先約七日酔ひてや花ゝあるうん

六七九一七　香る

入ぬのう紙のひゝきるとのゝひの花ゝさうの四の更梅

七一八七六　仝

伏見町よりそる見ゆてこの字やのちいこの花ゝおゝよ青柳

錦糸幸綾機

七一七七七　色成

中の丁きのこの酒と呑ゝてつけまゝゝある花のゝんさく

五七五六六　八工

西つゝけよそゝおゝてかさしるよ花の中ゆく高色の実

五一九六七　八工

花のまるさ紅つむうけと新ゝうゝ咲傘のおめさ青るよ

七一五八七　綾機

よゝ殺ようの花のよゝ糸さんやのうまてかんさゝも一目千本

六一七八六　八工

中の町茶やう形落の毒森ところゝてゆうゝさゝう一枝

六一一十五

寄を兼ねてあるべし　樹々咲ふれて堀ふかに松のこずえ高

入工

品川月

七十五十三十　霞仙亭桃人

波のよるよりあらわる月の影ふかくあやぶ品川の海

七十三十八五　水鏡亭梅宗

一むらのさとぶと言ふる帆柱をおくりて出る品川の月

八十七六十二　淺・綉・菴

品川やのりとるそらぶれ出る月の桂ふきもかくるを

十八十三五七　振　吉

夕月くもを行うみ雲の袖引て月よとゆる紀品川の霜

八十五八八　春潮亭梅久

品川の駅ハ衰ふも湊まて月の出舟や家の入舟

六十九七六　振　吉

村雨ふと降ふ海苔とて月よ形ふ品川のはら

七十三五八六　綾　亭

品川よのうとる兼乗ハ秋の夜の月の桂のかげのやとる末

十三一十九五　不尽亭

品川の月の紋日ハ八百里山さんとらふ者を迎ふ

八六十六八　不尽亭

星の数居ゑゝふ中ゐひとゝせのすぎゆくや秋の月の新

六六八十八　祇亭

品川よ磯蘇とゝそもんのゝ月の新の方へおもむく

十八八六八　面志楊有安

西川の月の鬼のかけうちやゝ一ゝねゝ松てきゝるうちゝみ

八六七七八　糸正

神ゝ浦月みえゝゝゝ地ゝ網かゝらゐあゝ雲ゝハゝゝゝゝ

八十一十七　春日宝三長

生潮のゝ多き月入と西川のゝゝゝゝゝゝゝ新ゝ月の下

七八八七六　西山楊

西川やたゝゝ歪をゝゝ多ゝゝゝゝ碑新の月乃桂男

八六八八六　春日亭長人

品川やまゝゝ枕の舟変ようらいて祈ゝれぬ月のゝゝゝ

六十八五六　含笑菴通列

西川の玉つゝゝみて花唇のかゝゝゝゝゝゝ月のゝゝゝ

七十五五八　鱗馬

形ゝなる大松板よ新ゝゝて月人男哲ゝ足通ゝ

八七八六六　不老園

むゝゝ雲ゝゝいゝちゝゝゝて西川の月ゝかゝゝゝゝ毋ゝゝゝゝ

八一七十五　一西山　楊

堺上寺　遠生　かゝる西川の月を山の方とさゝぬく

十八一七七　捨　巽

月うみよ舞子の袖のあさ二つゐ〜ひ〜四もとゝゐる西川

八七八九六　日光　三界堂　無窓

月よ寝る人ハにくゝあと西川よおきて形ナある舟の帆柱

七十七五五　東宇　菊香

帆柱の楊枝うれも西川や仲すゝ出る月の桂男

八八五六六　宝鈴　福住

去ゆくゝゝる月よ波のあうみもかゝりてゐる袖の浦波

七七十八一　春　明

てる月よ原の花さく西川や一日千本仲の帆柱

八六七七五　振　吉

西川の月の宮のあみかちとりて舟をゝ乾出るかれ(ゝ)

六八八六五　仙寿　千柳　卓

さゝの葉の月の鬼よ帆柱もとくさゝえる西川の仲

六八八六五　一巴流　斉

西川や月の鬼のゝ舟ゝ仲ゝくさのやゝ〜ゝてる帆柱

八七五五七　枝　成

西川ちゝ〜ゝ〜ゝ月の舟ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ〜

六六七五八

帆柱のとくさと見れば品川の月の兎も波をちらすら

六八五八五　　三馬

品川や九曜七曜きんぎんの光りをちらす月の名所

七七五八五　　川越　阿夫美

帆柱のさらさらゆゆしく仰ぐる元新くまれてこそ品川の月

七六五六八　　催馬

品川の月の波間のまぜ者かいしれとある釜をの沖

五八五八六　　綾重

品川の沖てる月は波のよりかくれてこそみとゆる歌毎

五十五五七

たちかへるさらに紫甲のかさしにもうれまこそある月の品川

六一八八八　　落葉菴清武

月と見るく兎のまねを品川やかたにてこそある秋の夜のあ

五十七一八　　ヨリ井　琴月

見をくるきの星の林よりくてこそ亜井のしるなる月の品川

七一八七七　　鹿外　楼

品川の叶屋角よ旅人の新くそひくかり見

七一七五十　　吉芳

そをこそ見る月見て桂ふ品川よ秋ふ品川雲の三

八一八六七　　招　吉

てりそふる月の兎へ彼のくるくるる沖をゝ東の品川

六六七六五　　梶　人

市変じさそふ紅葉〳〵咲つゝ世のめぐる月の桂男

八一八六七　　仙有　千　柳　亭

かくてうりてうそふ月よいうあれは星あまそらの花品川の色

六八五五六

おちうとあつあけつゝ宝〳〵品川の鄙下屋後も月の雪皆

八一八五八　　桐　正

夕化粧つゝるくるつの品川や月のかゝりの出るわれくさそ

六七八一八　　芳

品川よ九さ月又て拾よ東へ四角ふひさと鄙にものふ

八七一五八　　カヌヘ　侍　春　菴

品川の沖よてりそふ月新の桂の枝をは手のう兼原

七六五五六　　仝

孫もやうて今者一夜へ品川よ爰〳〵にせん月の新そを

六七五五六　　巴　流　亭

のりなうぬ客やかゝん品川の法よさゝる月の桂木

六七一七八　　悟信　亭　任

中の町新てうちんの月うみ〳〵もうそうるまの夜病

七一八六七　小松亭原見

五六五七六　朱度菴九門

七七一七七　捨更

八一一十三五　米守

三一十八六　笑寿九

七一七七　蝶休亭長宋

五八八一六　松代　董

六八八一五　梅柳菴春江

三七七五六　一栄

六六五六五　鶴成

八一一十六

海房上往来月は春の出て来もくるなる品川の海

川ヨエ　柴栗黄鶯暴

八一十一五

品川やとまりの月を仕業にて春の三日入いそぐ

一　馬人

七一八一十

あきらかに月の夜こそ春の星入まれなる品川の宿

春江　辛

五一十一六

うらめしのうらめしてうらと品川やかくのとれる月の客人

千里　辛

八一一十一

夜さらのむ酒もまあたの鳥なくれ出さる船品川の月

ヨリ井　山水舎清春

五一十三一一

月うらよい海の金花ゝ多もて出るなる品川の秋

オク信夫　赤仙洞奥友

三一十三一一

帆ちらるる枝とさもてよりすらう月のあるる品川の舟

清　武

一十一五一

品川の茶屋なるお寺成あけ方の海一夏をくよる月うみ

喜　多　留

一一十一一

ほの見とまるる船をあ打もよく手をもと出る品川の月

久ナ　幸の家春時

六七九七六

月さらの野十条平家なるあく赤坂なる品川の月

淺　機

七七五五六　　後撰

かうまの九時の星と月よつのくに月よりあれてあるる品川

八七七一七　　仝

今もこゝすまるよりひてよる海と熱花とうの品川の月

六七五五六　　色成

再妙なる自由の星れに月こゝろも月まり出さと秋の品川

七一八七五　　仝

西さゝて殺つゝひよゆゝ月の出さ秋ゝるめゝる品川

深川雪

八八八十三八　　花咲菴米守

枝折の寄るさゝろめてさゝ傘の寄ゝ山の松安

七八八十三八　　駒馬園盛砂

ゝ絃おゝる中へさゝゝるなゝゝ寄りよりてある屋花やの寄

七十七五十三　　芳々籠梅風

麻ゝろひて寄るへてゝゝの橋下ゝゝゝ寄ゝゝめぬゝゝの屋鶯

七十三九七七　　桃山錦洲

仲町のむゝひいゝ花さゝゝりまゝ鶯出さと冬の梅本

八十八八八八　　唐縫舎糸光

さむゝさ紙よひ出さ寄るの寄ゝゝ多ゝ鼓ゝる口のかゝる仲丁

五十七十八
あつけの酒をよひ出して雪ふるさともむかひのかくら中京
東水亭色成

八十八五八
雪ふれハ木毎に花の仲丁やつもるも早く梅本のかさ
綱丈

三十三九七六
面白や翁も奥をみへ紫のころをかける雪の深川
拴莫

七十三五七六
深川の雪にをられし枝なれハ新車さる松の千代本
松亭久住

九八七七七
木にふりつむ雪ハさくらか桟橋にそよくのあふ並ふ深川
催馬

九十五七七
枝折とまけハさあくてくるあの杉葉をさくる雪の山本
仙台 芳閨皷

五十七七八
またなくなしまみちかあ初雪にふるもやんぬ深川の本
蔵田株照人

六八八八七
あそふ雪をまつ深き縁も毎つむく夜もみるゝ雪にうかり
桒聖菴

七十五六八
なよ竹も袖に[illegible]さきたれやのまつあくゝ雪の深川
千里亭

六七九六八
河岸あけの[illegible]とゝえて詠めある雪みえに未済のうかみの
米守

六十五八七　千枝屋一友

尾花屋よりつむ事の下はぎ袖ゆ〜初織手ふるう

八七八六七　光楊亭香名

やうくよ風ら拾てまそむく事の拾成望む事の中木恆

十七八五六　後　重

二ふくそやさ八幡詣のむく毎春めくるつる事の横物

七七七七七　苑囿亭雛馬

あうけする屋光石風よりそふん事の白う私ちこ仲千

六八七七七　不尽亭

ゆ〜〜そよふつむ事るとり記とつけそむる保川

六十五七七　梶人

枯枝よりつむ事の新年〜ふそ〜ひ光成世ふ枯ゆ

八七七六　綾亭

あ〜〜〜〜事ふ成よひ出そむうひ酒事るゆひ〜〜枯ゆのかさ

六六九七六　米守

保川ゆ白さよ〜〜〜春白さの事るゆ〜〜〜乱拾の頓売

七八七七五　長生鈴春明

〜〜年の貢物〜〜保川の仙蓬河岸ふつむ白うの花

七一八十八　カヌヘ　浅春菴

屋〜〜下ゆ拾〜〜る白梅の生ふよ八〜〜ふ事表な〜

三七五十三六　長人

有時さる宮の御立をよそ物うらに似て上臈の笑ふ仲丁

七七七七六　拾遺

うつり香の枕除川の紅うつり西の方の花や春の梅古

八十一七七　カヌ　俳諧　彦

朝ぼらけをむ名残の除川や見おろすかぎり春の百姓舟

五八五七八　長人

たゆたのよりくに見ひてふる乃の見ぬ春の仲丁

六一八五十二　不尽　亭

ふりつもり春に載る毛に三新葉やうんしやにそねのうつ除川

五六九六六　三の亭一常元

ふりつもり表やくらの夕春ひらくやく弟も出来る春の日

五七五八六　飄彦　百成

あつけなお計を呼てさそつまの尺をとらるる春の除川

六六七五八　舞乗　梅

うつもも又かくる春のなきを古れ撫てうつよるるむ春の面つけ

七一八七八　春江　亭

手る人春の見りけくふの三新葉や即春を出をあんうの香

六十五五五　梅　三東

尾形やよかくる春も凡流を神をうつうな多れ乃春

八八七一七　　朱　守

ひさしぶりなる新駕くすねうれて神のかくしとゝまる屋敷や

五八七十一　　歌林堂

新年〜むらしの丹しのるまつかゝりの手紙玉の浦川

九一八七六　　向陽亭山守

寒あるよ花とかさねふ諸貫と丈夫まつめれ玉の中木坂

七一五十二六　　万　守

青〜ゝまりなしみの寒とゝろ〜砂や鶴〜ゆけ〜玉の中丁

七八一五十　　軒賀・月盛

まつかりとつの玉の浦めりよ八幡ゝ紙と拾ゝ西〜みゝ

五十七八一　　西来　居

雲のその巻本よ芹多の小鹿やゝ〜きまの西〜みゝ

六十五一八　　一　馬

新戸物よふなせ〜おとむりとゝかゝ〜ゝ入年ゝ玉の浦川

五八五七五　　綾　童

階〜〜ねむりとゝれふ売とつ〜〜脇町の玉の夕〜と

十一九五五　　春林舎梅武

冬〜ゝれや玉よりく屋敷やよまねくみのゝ〜ゝ鶴かゝそ

六六八五六　　文門亭近彩

浦川よみゝも玉自玉の口ハ蛍〜ゝ多ゝ笠のいゝ

八六九七〇　鈍　辛

あ好む梅かをりて空く丹も雪のあらるるさて他極

三六八五七　便　蓋

月ゝゝる雪よい実も赤ゝゝて枝牙丹よりも尾花やゝ門

五一九七七　麟　馬

見ゝ沢といふ人の実よなりてかゝるゝ多きる雪の仲丁

六十七一五　長三郎　園南秋

拳酒よ祈ゝる雪の保川よりもとゝう言や竹の下をも

七一八五八　仙子　森中園保世

保川や久ん〳〵やゝ夏の見訪も恋さてゝゝゝる初雪

五一十七六　梅　盛

雪人の酒の香ゝ暗一羽けやきゝゝゝゝる木節の初雪

八一八六六　北　斗　彦

雪の日いかく刑ゝれて子丑寅の火許よつゝ保雪の灰

五十一七十　雅友　辛遊山

ふれやふれ衣の表裏やゝゝ裾つまよさゝゝゝる初雪

五六八五五　乞　女

雪ゝゝゝゝゝる日ハ〳〵知恨の大ゝゝゝん雪の保川

八七一七五　清　武

何ゝゝゝ雪の柱や俤ゝゝうんよさゝゝゝる雪の木切

六一七九五　　六　極　園

行つけて春の土橋よぬきて夏来るも宮居のうちのぬみぬ

七一七七六　　糸　光

西つけの春の水さきあて来花のもり咲もめぐる春の柳本

七六八一六　　豆小路味噌成

つめるわと春もあつき柳本のあらめ寄り紅葉の仲丁

六八五八一　　英　寿　九

白妙の春の仲丁ふる雨ぬて上る山本乃春

六六五六五　　大福堂笑寿

うら表春の日よ春ハ保川や猫つれあつりひるの上すて

五十一七五　　綿琴亭春糸

のる人もあらんとなん保川の岸の筏ハ春のはれ木

六七五五六　　三　馬

さつとりよ忘さしのありてめくをも行つみのく紅葉の中裏

三十一七五　　一　栄

あつつて傘の手毒ハ指保るもつこ春夕ん春の仲町

六十八一一　　拓　吉

保川や春沢くさ花り十粒のさ紅市よさ春の山本

五一五十五　　明　良

保川く春夏毎ろつい子て四へろつの石とうまよ

十一　一七六　　万　　守

うゑて春のけしきは鶯うぐひす舟も桂の月のまくらてん行孝

三一十六五　　梅　時

神の木の梅なとうゑて春の舟ふんらんさもる乃日

七一一五十　　福　伯

ふのふらうゑて出て又春のふゑ石垣てそふもあつみ

五十五五五　　綾　機

うゑれの春のふんの弱とうて神おそうふ屋敷やの門

六六五八五　　仝

かくさくと上ゑこうるふれあうあるまうあるまの保川

七七八一六　　色　成

ふゑもくといとうゑかくてうやうまゑ行つゑよやくまの中うう

十七五一五　　仝

うう祝む春木のうう保川のまうをあるまの松本のかう

六一一七十　　綾　機

保川や初舟の春の毒ひるまをとつくうう春の保川

當坐　吉原の茶屋　至清堂判　義云者ともの方まうくあるふあるとのまゑとも

十五、　　雪　堂　花　桂

茶屋ふさうくゑ義云者ふうう春の昔と思ふきやうくうる

うゝひの花ゝ紙のまとゝてまゝゝ蔭の奚や為ん　米　守

十三、　一　馬

ふゝりまく茶屋をひゝきてまゝゝ冥蔭者の山表の夢　桃　人

中の町茶やうめてゝと須豆賀の指子木よりまゝゝ　鈍　亭

十四、　表初のそはゝ蔭表人見寄る弟の出ゝゝ里のにゝゝ　不　尋　亭

ひゝゝ流ゝゝゝ山ゝ砂よ至ゝ巴よゝゝゝ山にゝ門

彩ゝゝうなゝゝの茶やうゝゝゝ山や豆賀よむゝひゝゝ　作谷　琴　月

ほゝふゝゝの夢と揚屋よゝゝゝ中の町あゝ花の山表　彼　坊

紙ゝゝゝ行ゝゝ記彩ゝの蔭紅葉かゝるにゝゝゝや表初の表吳　彼　亭

うゝれめのむゝゝゝゝゝ引乃見俳表毋の像　桃　人　狂言

當坐　品川の辻駕　霞仙亭判　のせゆくゝゝ　おゝゝゝるゝゝ

十五、

瓜の屋花丸

十三、

三　馬

卧竜園

紀長人（エドザキ）

十二、

松ヶ亭千枝丸（クハナ）

二　象

卧竜園

月琴（フウヤ）

小松亭原見

同車から隔さえて深川へ遊ひにかよふ駕かな　不老園

稲毛から偽りもたせて又田町くいそく深川のかて　二字守

當坐　深川の舟宿　宝市亭判

船頭の手ぬくひ
さして行かけもとも

十五、口数の多くて山の松本よあまたのかせる二人舟　不尽亭

十三、一舟子向ふ新地の泉のきれ掃くにむかひいそく桟牙舟　佳

本田金斤位

ておくれた石場の桟よりかさん客子浪風主ね舟宿　臥竜園

十二、舟いそく火ともし頃の池堀伊予まつ花の妻かな　仝

尾花やの舟の見ちみのまかさる麻ならさる客も桟牙舟　原見

桟橋へあやひをつけて船頭にあめのともあるある深川　小萩

桟橋へつけて石場の切あそひ停車の舟と告る船頭

鈍〻亭

うられけり桃の牙の兵の向ふさきを手におひ子かなし者たちの世なり

桃人

あけぼのの春日をとめる秋野の家の咲きかける追風

米守

かぶらもと綾なる詞の上さくらあをみかる桃牙弁

當坐画賛合　六樹園大人判

元日の朝霞に鳥のなきあるを

十、春かすみはれてうれしき松の間鳥霞の袖につゝみてや

米守

立臼の上に大黒のかゝりけるを

、米臼の上に杵もつ大黒は世をつくく人に福もおもらん

春江亭

仝　若葉亭大人判

ひめの花のちるを

十五、わすられぬ春やそよふれ夕日の花の香にをしの桜翁

壷外楼

こえやまいのうたを

、みぬ戸桟のゆらの袂は萌代のわかやひとえんひえ蔣の小田

鐵屯

、新わの夕立にわたりしひえおちを飛あつ虫や稲妻のかげ

俊馬

手中は米つきかつる示を
ゆつかる手ゆも力ゆすら男う搗るよろうた松の立臼　二字　守

十三、
伝聖米をつきあるも紀と手そろふかけわ〳〵はあり雪の色れ　巴流斎
夕新ゆとんわうとあわう　小萩
鏡ゆう四のちるあゆ秋は出おさてるやうよこまる多うれ
早苗とる示　一友
夜ゆあう仕業ても紙のゆう又二三反搗るおくを田
精校ゆ〳〵紀おひゆう　万守
あのちうて年花ゆ神ゆきらつん降る精校ゆうう乃はふ

二十二点より二十点之部

春宵軒（カヌマ）	月良	你東亭	亀雲		
斧	侶成	遠野楼	紀陰		
春路亭	柳馬	高浪	千秋		
汀亭	亀住	目限	貫先		
和春亭	花軒	和順亭	四位		
酔升菴（トヤキ）	一計	彷徨亭	仕		
陰徳舎（カヌマ）	積方				

十点以下之部

はる	かめ	めと（ヒロサキ）	あり					
とこ	すこ	むと	ひと					
くら（クハナ）	つこ	はな	おと					
ふけ	むと	かみ（クハカヘ）	ゆう					
いて（トチキ）	ゆう	たる	おき					
てる	ひと	こと	をこ					
つ祇	なり	てふ	てい					
元と（エチゴ）	ゆと	みち（トチキ）	はと					

壺川亭（カヌヽ）	素道						
俵数亭	枚成						
貪寿堂	象行						
樓亭	枝炭						
宇津	巻方						
鋼古菴	智量						
歌仙樓	道秀						
牡丹堂（川越）	花爰						

むら	ひと	をか	まる				
そな	まち	おく（オタ・レハラ）	とも				
ゆき	かつ	らく	なり				
おや	まさ	たか（トヽキ）	祇				
めく	より	さろ（ハヲサキ）	え				
ます	よ祇						

世話役　難波　梅むら　俵野　米こり　林堅　祇ひと

十点以上之部

雪堂	花桂	亀川亭	空鶯	波走亭	卯浦	雅友亭	遊山
五八分（カヌヽ）	舞窪	五葛軒	浦浪	花本亭	芦蛛	便舎亭	多丸
清明軒（ヒヽ）	東表	尽柳亭	逸成	弓象舎	大鶏	錦屋堂（ヒヽ）	折浦
本田舎	斤信	和本亭	仲好	花信園	上尽		

狂歌細見景品題摺持之部

千林菴	一栄	不背菴	珂成	唐邊舎	糸光
千桜舎	一友	向陽亭	山守	東水亭	色成
常藝斎	冬信			大家舎	振吉

文政元戊寅年
六月開巻

校合所　花咲菴米守
催主　錦糸亭綾機